

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（八）-第三編その
2-

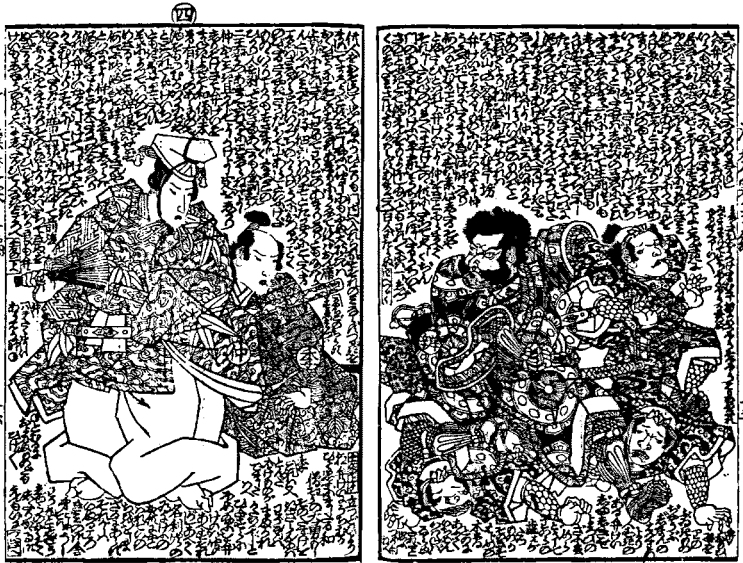
メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22156

曲亭馬琴 『漢楚賽擬選軍談』 翻刻 (八) — 第三編その2 —

神田 正行

凡例 (摘録。詳細は本誌五三九号 (平成31年) 掲載の、本稿 (一) 参照)

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落・章段を設けた。話題が改まる位置には、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書ことばがきは同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本 (U36956。改装本) である。虫損や着彩、シミなどが目立たぬよう、画像には最低限の修正を施した。



(15ウ・16オ 弁慶、宴席に押し入る)

(四)

供人を、恐ろしく思ひ給ふか、一人も門内へ入れられず。そのみならず剣を舞はして、客人を脅し給ふは、聞しにも似ぬ大將軍は、憶病にこそをはするなれ。余りに飢ゑて候へば、御席上に推参して、せめて割り籠の余りな

皆々「輪宝つけたる武蔵坊に、滅法そつぼう」▼頬

のこと「張りのめされた。みごとに負けてとちめんぼう。敵はぬ許せ、苦しい〜。

弁(弁慶)「思ひ羽織の不粹者、丈夫自慢の樊噲より、人好きのある弁慶縞。仕着せ鎧の雑兵めら、どうしてわいらの歯が立つものか。その着衣はじめの木曾殿に、会ふて一番言はねばならぬ。誰だと思ふ、つがもねへ。

季(へ越後忠次季光)「これは又、飛んだ化け物が出ましたはへ。

仲(義仲)「ハテ遅しい荒法師。●／●止むるに及ばぬ、者ども引け〜。

りとも、給はらんと思ふのみ、別に仔細は候はず」と、高やかに答へたる、声はさながら疾き雷の、頭の上に落つるがごとく、伸びたる月代逆立ちて、山嵐といふ獸の、怒りしよりも凄まじく、眼の光人を射て、その様あたかも金剛二王の、天下れるに異ならねば、義仲驚き且感じて、能景・義定を叱り退け、さて弁慶を招き寄せて、「和僧は未曾有の荒者也。酒をも飲むか、いかにぞや」と、言はれて弁慶ちつとも疑義せず、「さん候。義によつて、命を召さるゝとても辞退せず、何でふ飲酒を辞し申さんや」と、言ふに義仲ほう笑みて、「しからば酒を飲ませよ」とて、大盃を給はりければ、弁慶やがて引受けて、続けて三度傾けけり。

すでにして義仲は、この時いたく酔ひたりければ、席上に倒れ臥して、前後不覚に見えにけり。その時頼朝は、立ちて「衣を脱ぎ更えん」とて、遠侍へ出で給へば、親良も弁慶も、主の後方に従ひて、人なき所へ

▲左の上より立集ひ、頼朝弁慶にうち向かひて、「思ふに増したる和僧の大勇、もしその助けを得ざらんには、

我が身免れがたかるべし」と、ひたすらに誉め給ふを、弁慶は聞あへず、「某あへて名利の為に、今日のお供に雇はれて、命を惜しまざるにあらず。某は往ぬる頃、君の御舎弟牛若丸と、主従の約束したり。かゝる御縁も候に、次へ(16才)／かねて相知る齋宮介の、頼みも黙しがたければ、こと遂にこゝに及べり。しかるに君は十万騎の、大將軍になり給へども、牛若丸の御在処を、尋ねんともし給はざるは、いかなる訳の候やらん、心得がたく候」と、託言がましく怨ずれば、頼朝答へて「されはとよ。牛若丸のことはしも、忘れたるにあらねども、彼が鞍馬を逐電せしより、その在処を知る者なし。往ぬる平治の戦ひ敗れて、我が身流人となりし時、牛若わづかに二才にて、母の懐にありしかば、迭にその面を見知らず。かの者この世にあらんには、我が招きを待たずとも、尋ねて我が陣に来べかりしに、今日までも訪れなきは、これも亦心得がたし」と、言ひ解き給ふを親良止めて、「その義は今の急務にあらず。木曾殿酔ひ臥し給ひたる、この隙に疾く出でさせ給へ。疾く」と急がせども、



(16ウ・17オ 頼朝、弁慶を賞す)

頼朝はなほ立ちかねて、「別れも告げず出でて行かば、

かの人怒りて禍起こらん。この義はいかゞ」と危ぶみ給

ふを、弁慶憚る気色なく、「君聞こし召されずや、古の

諺にも、大功は細瑾を顧みず、大礼は小讓を辞せずとい

へり。今木曾殿はまな板のごとく、君は魚肉に似給へり。

久しくあらば屠らるべし。疾くく」と勸むれば、親良

も又言ふやう、「某残り留まりて、よろしく計らひ候

はん。急がせ給へ」と申すにぞ、頼朝つひに心決して、

結城・真田らの供人を、名残りなく従へて、葉上の陣に

へ義経様子を窺ふ。この人の振る舞ひは、後に至り

て具に説くべし。【▼画面右上】

朝(頼朝)「諺にいふ地獄で仏、今日の命は和僧の

賜物。不思議な縁であつたよのふ。

弁(弁慶)「何さお前、あの位なことはお茶の子さ。

お礼で痛み入りますはいの。

良(親良)「陣門はこの和尚が、押し破つたれば障

りなし。いざこの隙に御帰陣々々々。

帰り給ふ。

そが中に弁慶は、道にて別れを告げ申し、「某が役目は済みたり。暇申す」と言ひ捨て、足早に走り去るを、頼朝急に呼び止めさして、「いかでかはたゞ帰すべきに曲げて葉上へ赴きね。喜びの引出物も、取らずべきに」と宣ひしを、弁慶は耳にもかけず、「その引出物何にせん。我は葉上へは用なし」と、辞みて早く立別れしが、かの草庵にも同宿せず、義経の木曾の陣に、あることをまだ知らざれば、訪ねて陸奥へや赴きけん、在処の知れずなりにけり。

◆親良、義仲に従つ

これより先に親良は、頼朝を見送りて、もとの所に帰り入る折、遙か彼方なる、幕の陰に人ありて、声朗らかに歌ふを聞くに、「飢ゑたる熊の山を下るに、石を掲げて蟻を見る。飲みて喉に入らまくする時、咳しつ、出だせども妨げず。危ういかなく。」と口ずさみたりければ、親良驚き訝りて、「あの人は世に稀なる、優れ者にぞあらんずらん。その姓名を問はゞや」とて、や、近

付かんとする程に、隠れて見えずなりにけり。その後これを人に聞くに、奥九郎といふ者也。これはこれ義経の、作り名にてありけるを、親良夢にも知らざれば、心憎くぞ思ひける。

○さる程に義仲は、酔ひ醒めて身を起こし、頼朝を尋ねしかば、親良進み出でて額をつき、「佐殿は酩酊しておん席上に堪へがたければ、辞して葉上の陣へ帰れり。▲右の下へ／＼▲左の上より折から君は御沈酔にて、熟睡し給ひたりければ、僕を残しおきて、喜びを述べ奉る。明日必ず参上して、謝し奉るべきにこそ」と、△／△言ふを義仲聞あへず、気色変はりて声を苛立て、「かの人暇乞ひもせず、擅に帰り去りしは、これ我を侮る也。無礼の振る舞ひならずや」と、齒噛みを鳴らして息巻きけり。その時覚明は義仲の、甚だしく怒るを見て、「折こそよけれ」と進み出で、「佐殿の今日の無礼は、みな親良がなせし業也。早く彼が頭を刎ねて、その後葉上を攻め給へ。疾く」と勧めしを、親良聞つ、ちつとも騒がず、「軍師の推量いたく違へり。殿もよく聞こし召

されよ。某は佐殿の、譜代恩顧の家臣に次へ(16ウ・17

オ) / ならず、丹波少将成経【韓王成】の、家の子で候ひしを、佐殿の頼みによりて、しばらくかの陣に従ふのみ。これらの訳にて候へば、何でふ佐殿の為に謀りて、殿を悪し様にいたすべき。もし某を用ひん為に、葉上の陣へ帰し給はゞ、清盛入道【始皇帝】より平家に伝へし、

太政官の印・勘合の印、その余の宝もみな、佐殿の手に入りたるを、取り出だして奉らん。君の御心いかにぞや」と、言はれて義仲面を和らげ、「汝が言ふ由偽りなくは、しばらくその罪を許さん。早く葉上へ走り帰りて、その品々を持て来よかし」と、言ふを覚明傍らより、争ひ諫めたりけれども、義仲つひに聞かずして、親良を帰しけり。

○さる程に頼朝は、葉上の陣へ帰り給ひて、時を移さず内間田幸弥二道を搦め捕らせ、その内通の罪を責めて、頭を刎ねさせ給ひけり。かゝる所に親良は、鴻の水門より帰り来て、義仲に言はれたる、ことの由を告げ知らせ、又太政官の御正印・勘合の印、全て平家の宝物を、皆義

仲に贈らんと、約束したる由を告ぐるに、頼朝これを惜しみ給へど、親良に諫められて、やむことを得ずかの品々を、取り出だして渡し給ひけり。

その時親良申すやう、「某は時宜によりて、木曾殿の陣に留まり、この後君の御為に、かの禍を防ぐべし」と、嘯きつ立別れて、鴻の水門の陣に赴き、又義仲に見参して、「勘合の印その余の宝も、佐殿より参らせらる。某もたらし候」とて、そがま、披露してければ、義仲喜び受け取りて、一つ／＼にこれを見るに、入道相国清盛が、嚴島の弁天より、感得の玉也といふ、名玉三つまでありければ、義仲深くこれを愛して、一つ【照星の玉斗】を覚明に分け与へ、「これ世に稀なる名玉也、よりに軍師に取らする也。遊び候へ」と、言ふに覚明受け取りて、後辺に置きたる鉄骨の、扇をもつて件の玉を、只一打ちに砕きしかば、義仲勃然と気色変はりて、「およそ人の臣たる者、君食べ物を給ふ時は、必ずまつ

○左の上よりこれを嘗む。君生き物を給ふ時は、必ずこれを飼ふといふ、本文もあるものを、我が今取らせし名

○右の下へ



(17ウ・18オ 覚明、玉を砕いて義仲を諷める)



玉を、打ち砕きしはいかにぞや」と、声高やかに息巻けども、覚明おめたる気色なく、「君は只この玉を、めでたき物に思し召せ共、この玉何の用に立つべき。昔唐土^{とうど}齊の威王は、車千乗^{ちゆうせん}を照らす玉をも、愛でて宝とするこ
となく、「我に賢臣四人あり、**次へ**（17ウ・18オ）／千里の外まで照らす」と言へり。されば又「楚書^{そしょ}」にいは

へ親良閉口して、覚明が功なきを笑ふ。

覚（覚明）「古^{いにしへ}の賢しき君は、よき家臣をもて宝とす。よしや夜光の玉なりとも、敵を滅ぼし国を治むる、為になるべき物にはあらず。こゝに御心^{ごころ}つかざるか。御運の末が心もとなひ。巴「君のお為といひながら、△／△笑止なことでござりますなア。

仲（義仲）「覚明心が乱れしか。余りといへば無礼の振る舞ひ。

ね（根井大弥太）「さて／＼短気な、これはしたり。

ずや、楚国にはもて宝とせず、只善をもて宝とす。某が宝として、愛づるは佐殿の首のみ也。君得がたきの宝に愛でて、その御志を失ひ給はゞ、我が輩 後つひに、か人の為に●／●虜となりて、身を葬るの地なかるべし。某感激する由ありて、扱こそ玉を砕きたれ、あへて君の賜物を、軽んずるには候はず」と、理せめて諫めしかば、義仲聞つ、苦笑ひして、「軍師の遠慮は甚だ過ぎたり。頼朝は勇なき大将、童に異ならず。うち捨て置ともいばかりの、ことをやはし出ださん。親良今よりして、我に仕へて忠義を尽くせ。頼朝の手にあらんより、遙かに増すことあるべきぞ」と、言ふを覚明又諫めて、「親良を留め給はゞ、自ら毒を嘗むるがごとし。明らかに害する者は、なほこれを防ぐべし、秘かに損なふ者は計りがたかり。油断大敵といふ諺も、かゝることにて候」と、面を冒して諫むれども、義仲つひに聞かざりければ、親良は秘かに笑ふて、しばらく義仲にぞ従ひける。

◆義仲、頼盛を面罵する

○その後又義仲は、葉上へ使ひを遣はして、頼朝に言は

するやう、「先に降参したりと聞えし、前亜相頼盛【三世皇帝子嬰】は、清盛の弟にして、宗盛【二世皇帝胡亥】の後見たり。平家の棟梁たるをもて、頭を刎ぬべき者なるを、佐殿旧恩ありと唱へて、助け置くこと心得がたし。早く此方へ渡さるべし」と、催促しきりなりければ、頼朝つひに辞みかねて、頼盛に由を告げ、「かねては我いかにもして、助け参らせんと思ひしかども、木曾の催促しきりなれば、今さらにせん方なし。疾くく」と急がして、頼盛主従に繩をかけ、木曾の陣にぞ遣はしける。

その時弥平兵衛宗清は、頼盛に申すやう、「先に福原を攻め破られし時、御自害を勧めしかども、なまじいに用ひ○右の下へ／＼○左の上より給はで、つひにこゝに及びり。某 今腹かき切つて、身を潔くせんは、いと易かるべきことなれども、いやしくも難に臨みて、君の辱めに、あひ給へるを、見返らで命を捨てんは、臣たるもの道にあらず。某も又捕らはれて、期に臨まば術あるべし」とて、頼盛ともる共に、木曾の陣へぞ引かれる。



(18ウ・19オ 義仲、頼盛を罵る)



この時義仲は覚明・行家、ならびに淡路の冠者宗弘、二河左衛門尉頼致ら、士卒数千騎を従へて、自ら陣外へうち出でけるに、たちまち頼朝の陣中より、頼盛・宗清らを送り来にければ、義仲馬上に鞭を上げて、平家の罪を責め罵り、「速やかに頼盛らを、斬つて捨つべし」と次

〔18ウ・19オ〕／下知せしを、覚明急におし止めて、

〔二河とも致〕〔頼致〕の誤力〕へ淡路の宗弘

皆々「今にはじめぬ我が君の御威勢、又格別なものじゃてな。

行（行家）「頼盛殿はともかくも、宗清は剛の者、言ひたいこともあるけれど、書き入る、せきのない故に、黙つてあるか、よいさまく。

仲（義仲）「君の仇家の仇、平家の奴ばら／誰をか許さん。早く頼盛主従の、頭を刎ねよ、手ぬるいく。

覚（覚明）「申上げたき一条あり、誅伐の義はしばらくく。

「頼盛はこれ平家の、棟梁也といふといへども、もとよりさせる悪逆なし。佐殿一旦助けおきしを、今たちまちに誅し給はゞ、西海へ走りたる、平家の残党聞伝へて、頼盛すら免れがたし、我々降参するとても、殺さるべしと思ひ定めて、世の中早く治まるべからず。降る者を殺すことは、よき大将のせざる所、よく／＼賢慮を巡らし給へ」と、言葉を尽くして諫めしかば、義仲わづかに怒りを収めて、頼盛と宗清を、厳しく獄舎ひとやに繋つながせけり。

◆義仲、清盛の墓を暴く

さる程に、平家は西海に没落して、あれどもなきがごとくなれば、「しばらくまづ戦いくさを収めて、集ひし味方の大小名を、その本国へ帰さん」とて、義仲この義を計らふに、そこらの財用足らざれば、覚明にこの義を問ふに、

「佐殿福原を攻め取りし時、およそ平家の金銀は、みなかの人の手に入りたらん。これらのことは親良が、よく知りてこそ候はめ。問はせ給へ」と勧めしかば、義仲この義に従ふて、親良を招き近づけ、件くだんのことを尋ぬるに、親良早くその意を察して、「こは必ず覚明が、勧めたら

ん」と思ひしかば、さりげなく答ふるやう、「平家は福原に、大廈高樓を建て連ね、あるひは兵庫に築島を、造りたるその驕りの、甚だしかりけるに、宗盛又色を好みて、石の下へ 左の上より遊興の為に費やしたるも、亦少なきに候はず。さればその財用尽き果てて、蔵の内は空虚なり。よりにて佐殿は、福原を攻め取りたれども、平家の金銀は手に入らず。さばれ入道相国、清盛の世を去りし時、金銀珠玉数を尽くして、棺と共に塚の下へ、埋めたる由聞こえたり」と、言ふに義仲頭を傾け、「申す所さもあるべし。しからばかの墓を暴かして、その金銀を取らん」とて、夫役の手当てを急がするを、覚明諫むれども従はず、行家を惣官つかさどとして、數百人の雑兵夫役に、件くだんの墓を暴かせけり。

そも／＼入道清盛の、墓は世界の宝を尽くして、土中に石の楼閣を造り立て、内には人魚の油をもて、長夜の灯ともし火を掲げたる、古今無双ぶそうの大墓なれば、たやすく掘りも穿つことかなはず、中へ 下よりいくばくの日を重ねて、金銀珠玉を掘り出だせしが、棺の内にはからく



(19ウ・20オ 行家、清盛の墓を築く)



りありて、開けば内より弩をもて、人をやぶると聞こえしかば、行家下知して石の棺は、**次へ**(19ウ・20オ)／そのまゝにしてもとのごとく、土を覆ふて埋めけり。されば塚の内よりして、掘り出だしたる金銀は、十万兩ばかりあり、その余の宝は数を知らず、夥しく取り出だしけり。

か、りけれ共義仲は、なほも心に飽き足らず、「清盛・宗盛驕りを極めて、福原に建て連ねたる大廈高樓を、一字も残さず焼き払へ」とて、兵らに下知しつゝ、

雑兵「やうやく金が二壺出ました。お受け取り下さりませ。

行(行家)「このくらゐなことではない筈だ。もつと掘れ。」

雑兵「北へ三丈、西へ五丈掘りつけたら、やうく

石の屍櫃が見える。大層な墓ではないか。

兵「もちろん。」

兵「今に昼休みの拍子木鳴るぞ、精出せ。」

あちこちに火を放さして、隈なく煙けぶりとなしてけり。さればその余炎よえん久しうして、三ヶ月に及びしかば、民皆慨然がいぜんと驚き見て、魂を痛ましめ、「木曾殿とんの暴悪は、をさく平家に劣らず」とて、譏らざる者なかりけり。



(20ウ) 義仲、清盛の墓を暴くよつ下知する

仲 (義仲) 「昔伍子胥は楚の平王の、墓を暴きてその

亡骸なきがらを、鞭打ちしといふ例なみしもあり。いはんや

■金銀は国の宝、屍しかばねともる共に、土中に埋うづ

むべきものならず。掘り取る時はその益多し。

欲心をもてなすにあらず。皆々この義を心得よ。

良 (親良) 「御もつともなる御意の趣、恐れながら

感心々々。

作者曰「此所の画は本文と、前後するに似たれども、

細画は半丁に収まりがたし。かゝること稀にあら

り。見る人承知の前なるべし。

馬琴作 国安画

※左上、売薬広告

家伝神女湯〔婦人血の道諸病の妙薬〕 一包代百銅

この薬は高料の薬種多く入れり。世の常なるふり出し薬の類にあらず。用ひてその功の速やかなるを知るべし。

精製奇応丸 大包代式朱、中包代一匁五分
小包代五分。端売不仕候。

薬種を選び、製法を詳らかにし、分量家伝の加減をもつてす。この故に、その功百倍、あたかも神のごとし。

熊胆黒丸子 熊の胆汁をもつて丸ず。 一包代五分
多く糊をまじへず。

婦人つぎ虫の妙薬 一包六十四銅、半包三十二銅
つぎ虫はさら也、産後下り物の下りかぬるに
用ひて血塊の憂ひなし。

製薬 滝沢氏
弘所 元飯田町仲坂下南側四方の向 たき沢氏

(20ウ)

第二冊 後表紙封面

義 去 香	義 去 香	返 丸 小 支 月	御 詠 替 嶋 廻	角 力 推 古 傳	千 代 褚 良 著 聞 集	代 夜 待 白 女 辻 占
全六冊	全六冊	全六冊	二冊	每編四冊	全	全六冊
西村屋	西村屋	西村屋	西村屋	西村屋	西村屋	西村屋

▼奥目録「文政十三年庚寅新彫絵草摺目録」。底本はこの目録を欠き、林美一氏旧蔵本には虫損があるため、やむなく九州大学図書館蔵『代夜待白女辻占』から転載した。

《第三冊 前表紙・同見返し》



(前表紙)

曲亭馬琴著

和漢撮合／三編下帙

每篇八卷合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談

三

(見返し)

馬琴作 漢楚賽第三編之參下峽 国安画 【▼上欄】

林間りんかんに紅葉こうようを焼く、壘とり酒さけのかん楚賽そまがひ 和漢やまとものこしわり 割升わりますに、辛口ごしませ甘口かんこう篩せ雑ざつで、綴つづるものから板元いたもとの、株くせを守る好このみにて、通俗物つうぞくものの筋すぢなれど、推おまもされず潰つぶされぬ、世界定めのはじめより、生なさぬ趣向すけうで筆しづ流りる、つまり肴さかなの白梅老人うめぼし、粹すいは昔むかしの余波なごりにて、俟またぬ果報くわほうも夜飲よみの化癖あだくせ、一盞いつさん二猷にこん三編へんの、下峽げちつは亭主ていしゅにあづからせ、今茲ことしへ遺まはす巡めぐ盃はいも、迹あと引上戸ひきじょうこの長物語ながものごと、そりやその巴豆はづでも紫円しぜんでも、くだらぬことを繰返くりかへす、倭文しづの芋環鉢巻やまはちまきの、十露盤じゅうろばん額ひらで胸算用むねさんようを、合せ鏡あはや四斗樽しとだるの、筵包ひしろうに戯氣たはげの正銘せいめい、永寿えいじゆが左利酒きざけの、跡催促あとさいそくにかよひ帳ちやう、去歳こぞの極月しげつの、後ののち四冊しさつは卯うの新版しんぱん、よしをことわる端書はしがきにも、本性ほんじやう錯ぬ白夫かの生醉なまえひ、孩童こどもを敵手あひてにいつまでも、よい御機嫌ごきげんで述のぶるものは、物ものの本ほんの作者さくしや、曲亭馬琴まがひ 印 (乾坤一艸亭)

▼下峽の刊行が翌年に持ち越されたので、この半丁が

序文代わりに草されたのであろう。

辛卯孟春／永寿堂梓

(五)

◆義仲、征夷大將軍となる

さる程に義仲は、清盛の墓を暴かせて、数多の金を得

たりしかば、諸軍勢しよぐんせい凱陣がいちんの、手支つかえはなけれども、さらに又思またふやう、「頼朝よりともをはじめとして、軍功ぐんこうある輩ともがらの、官職くわんあつかをおし上のほし、国郡こくぐんを沙汰さたせんに、はじめ信濃宮しなののみやの御前まへにて、義仲・頼朝よりとも両大將りやうたいしやう、都へ早く攻め入る者を、武家の棟梁むねらやにせらるべしと、定められたりけるに、頼朝は福原の、新都しんとにやうやく討ち入て、平家を西海へ走らしたる、功こうに誇り約やくを唱となへて、自ら武家の棟梁むねらやに、ならんと欲ほりする下心こころ、よろづにつきて表うらはれたり。理ことわりあるに似たれども、我叡山われいざんにうち登り、戦はずして敵を走らせ、平家の奴やつばら都を落ちて、福原に逃げ籠もり、又我が都へ討ち入りたる、勢いきほひに聞怖きこおぢして、平家はそこにもたまりかね、安徳帝あんとくていを具ぐし参らせて、遠く西海へ没落したるは、皆我が軍威ぐんゐのいたす所、これ頼朝が功こうにあらず。いはんや我われはいち早く、平安京へ討ち入りたれば、武家の棟梁むねらやたるべき事、理の当然たうぜんといふべきのみ。さるを頼

朝は、清盛が、私わたくしに造り立てたる、福原を都と唱へて、功を貪らんと

▲右の下へ／▲左の上より欲するとも、何者か従ふべき。これらの由を法皇と、信濃宮しんののに聞えあげて、恩賞の沙汰をすべけれ」とて、やがて使ひを参らせ、こと云々しかくと乞ひ申せしかば、宮はさら也法皇も、「義仲が我がまゝなる、先約せんやくといひ軍功といひ、頼朝をこそ武家の棟梁に、なすべかりしをいかにぞや、こは道ならぬ計らひかな」と、思し召し次つぎへ(21才)／たりけれども、「彼が望みを叶へずは、さらに又野心を起こして、至尊を苦しめ奉る、こともやあらん」と危ぶみ給ひて、その乞ふ旨に任せられ、左馬頭さまた義仲を、伊予守いよのりに兼任して、「よろしく武家の棟梁と、仰ぐべし」と仰下され、頼朝は只もとの位に、返されたるのみにして、兵衛ひやうゑ佐に任せられ、この余行家を備前守びぜんのかみ、義定を左衛門尉さゑもんゑうになされけり。

その時義仲は、覚明を招き寄せて、「我今武家の棟梁に、なり上りたりけれ共、名目なうらいまだ定かならず。何と称へてよからんや」と、問へば覚明頭かうべを傾け、「御説で

は候へども、某とても弁わまへがたし。齋宮いっぎ次官親良は、今の世に多く得がたき、和漢の博士はかせで候へば、かゝる古実こじつに詳しかるべし。まづかの人ひとに尋ね給へ。さばれ親良言葉ことばを飾りて、傾け申すことあらば、速やかに頭かみを刎きねて、その罪を糺ただし給へ。これ亦一事両用の、計らひにこそ候なれ」と、言ふに義仲領きて、扱親良を招き近づけ、「我すでに思ひのまゝに、武家の棟梁になりたれども、名目なうらいまだ定かならず。何と称へてよからんや。和殿は和漢の博士也。只今考へ定めよ」と、言はれて親良思ふやう、「こは覚明が助言じょごんにて、これらの答へに異議あらば、それを罪として誅すべき、為なるべし」と悟りしを、色にも出ださず小膝を進めて、「昔景行天皇の御時おんときに、武内宿禰たけのうちののをもて、棟梁とうりやう臣になされしかども、いく程もなく改めて、大臣と称せらる。是らは万機ばんきをまつりごつ、後の太政大臣のちのたじやうに、異なるべくも候はねば、武家の先例に引くよしなし。古いにしへ 東夷西戎の、帝に背く者ある時は、討手の大将を選まれて、それを將軍せうぐんと称へたり。されば崇神天皇の十年に、四道しどうの將軍を遣はして、夷賊を△

△誅伐し給ひしを、世に將軍の始めとす。この後征東將軍あり、又征西將軍あり、又鎮守府將軍あり。そが中に、四道の征伐を兼ねたるを、征夷將軍と稱へたり。

右の下へ／＼左の上よりしかれども賊徒誅伏する時は、

その將軍たりし者、帝より給はりたる、節刀・駄鈴を返し參らせて、もとの官に帰れるのみ。いつくまでも兵権を、掌ることはなかりしに、清盛入道武家より起りて、大臣の位に備はり、文官の上に立ちしより、古礼や



(21) 頼朝、義仲に伺候する ※次図と一連

うやく改まりて、その権只今君に及べり。これらの古実を考へ合はして、とにもかくにも選ませ給へ」と、憚る気色もなく答へしを、義仲聞てうち領き、「和殿の議論予が心にならへり。我法皇に乞ひ申して、

右より將軍にならん」とて、由を京都に告げ奉り、こと云々と乞ひ申せしかば、法皇やむことを得給はず、すなはち木曾義仲を、征夷大將軍になされけり。これよりして義仲の、勢ひ朝日の昇るごとく、心にかゝる雲もなければ、世の人驚き且恐れて、朝日將軍とぞ稱へける。

かくて又義仲は、頼朝・行家・兼安・経久らを、招き集へて勅命ならびに、任官の由を伝へ、すなはち次へ(21ウ・22オ)／＼頼朝は伊豆・相模、二ヶ国を領すべし。又妹尾兼安は尾張国、その子兼通は遠江国、難波経久は、駿河国を領分として、頼朝の押さえたるべし」と、秘かにこの義を述べ伝へて、等しく位記をぞ渡しける。

皆々「お召しによつて時刻を違へず、いづれも揃ひ

をります。



(21ウ・22オ 義仲、将軍となる)

○さる程に兵衛佐頼朝は、義仲の公ならぬ、計らひを憤りて、安からず思ひ給へども、勢ひ強弱の差別あれば、それを争はんはさすがにて、言承けしつ、葉上へ帰りて、

巴「二編にも此やうな、画組みがあつたと言はれよ

うが」▼本稿四（本誌五四七号）34頁、ま、

よ、女が少ないから、又お手長に出ましたはいなア。

▼巴の手には、三方に乗せた御教書が描かれる。

今井「草木も靡く、我が君の御威勢は、又格別な物

じゃてな。

仲（義仲）「かりそめならぬ武家の棟梁。まづこれ

までにはこじつけたが、世の評判記はどうであらふ。骨折りを見てくれればよいが。

覚（覚明）「軍談もの、筋なれば、ちと堅苦しいや

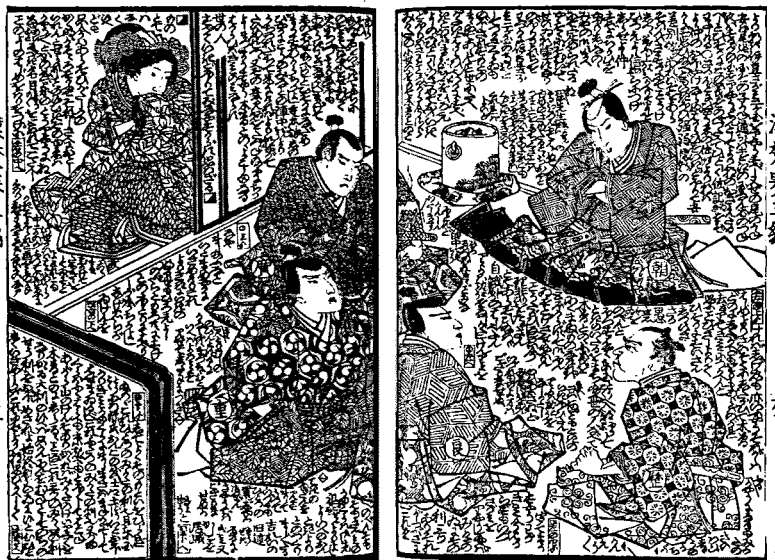
うなれど、実があつて面白いと、言ふ見巧者もござりますれば、憚りながら御安心。○／＼我々までも喜びをります。

由を広元・善信ら【蕭何】に告げ知らせ、「義仲すでに誓ひを破り、信濃宮の御前にて、定められたる約束に、背きて征夷將軍になりのはり、我らを僅かに伊豆・相模、二ヶ国の守として、官位も上されず、もとのまゝにてあらんこと、世に堪へがたき計らひ也。いかにすべき」と息巻き給ふを、広元・善信等しく諫めて、「御憤りはさる事ながら、今さら味方の小勢をもて、木曾殿と争ひ給はゞ、石を抱きて淵に臨み、焚き木を背負ひて火に近付くより、なほも危うき業なるべし。曲げて忍ばせ給へかし」と、秘かになだめ申す折から、親良【張良】・重忠【陳平】忍びやかに、鴻の水門の陣中より、うち連れ立ちて来にければ、頼朝やがて対面しつゝ、又その意見を尋ね給ふに、親良まづ申すやう、「木曾殿の邪なる、計らひは君のみならず、世の人全て憤りて、皆安からず思はざる、■者としてはなく候へども、只今は争ひがたし。かの覚明がそくろをかふて▼そそのかして、某さへに陥れんと、せられし事の候ひき。その故は斯様々々」と、かの武家の棟梁に、相当るべき名目を、問は

れて答へし事の由の、始終を告げに▲右の下へ▼左の上よりければ、重忠も亦言ふやう、「某は始めより、催促に従ひて、木曾殿に従へども、折もあらば逃れ去りて、君に仕へんと思ふこと久し。よりて秘かに推参しつゝ、いさ、か愚意を述べんと欲す。早く東国へ入部して、時の至るを待ち給へ。世の人なべて木曾殿の、不義を憎まぬ者なければ、遠からずして御本意を、遂げさせ給はんこと疑ひなし。只今理非を正さんとて、争ひ給はゞ自滅の端也。短慮は功を成しがたし。賢慮を○左へ▼右より悩まし給ふな」と、いとまめやかに諫めけり。これより先に、沓岐歴世【酈食其】も、広元・善信らともろ共に、佐殿の辺に侍りしが、今親良・重忠らが、意見を□石の下へ▼左の中より聞て申すやう、「我が君今凶らずも、伊豆・相模を領し給へば、味方の為にその利三あり。某具にこれを述べん。そもく相模の鎌倉は、御先祖頼義

▼22ウ・23才 詞書

ふる(歴世)「かやうになるも味方の幸ひ。始終の



(22ウ・23オ 頼朝、東国帰還を決意する)

【▼前頁から続く】勝ちが▼／▼肝要々々。

良(親良)「只何ごとも時の勢ひ。短慮は功を成しがたし。言ひ合はさねどみな同案、いづれも如才はござりませぬ。

ひろ(広元)「あつばれ聞きごと、皆的中てまうちゆう。ほとんど感心いたしますく。

重(重忠)「尺取虫の伸びんとするに、必ずまづ縮むといへば、弱味を見せて下手したにつき、◇／◇敵の油断を見すまして、討つて出づるも一つの軍術。御前、さやうではござりませぬか。

朝(頼朝)「諸先生の高論にて、初めて夢の覚めたる心地、親と妻とを質草とは、切な細工に似たれども、まづ当分の繰り回し、口説きを聞いてくれればよいが。

政(政子)「こ、まで出かけて立ち聞きを、してゐずとよけれども、此世界は初めから、中二階【▼女形ふつてい】が私底故ふつていに、書き添えられた画組みの手配り。お世話なことではないかいなア。

・義家の御時せんときより、殿造とのぞうりましくたる、吉例の旧迹なるに、君又彼処かこを居城と 印へ 印よりして、よくその基もとを開き給はゞ、これ一つの味方の利也。且東国には源氏恩顧の、武士・郷土ごうどいと多かり、君鎌倉にましまさば、招かずして馳せ参るべし。これ二つの味方の利也。又鎌倉は福原へも、京都へも遠くして、箱根・足柄山の險阻あり。か、れば味方の計略を、木曾殿に知らるゝ、ことなし。これ三つの味方の利なり。かゝる大利の候へば、只勤忍を旨として、後の勝利を思し召されよ。始終の為に候」と、心等しく諫めしかば、これにぞ頼朝思ひ返して、次へ（22ウ・23オ）／入部の用意をし給ひける。○か、りし程に覚明は、主君木曾殿どのの沙汰として、伊豆・相模二ヶ国を、頼朝の領地と定め、近きに入部あるべき由を、伝へ聞つゝ、うち驚きて、義仲を諫むるやう、「佐殿すけのどのの領分を、東国にて宛て行はれしは、虎を千里の竹藪たかぞぶへ、放ちやるに似たるべし。かの人鋭気を養ふて、味方の憂ひとならんこと、鏡に照らして見るがごとし。しかれども事すでに、定められしをいかにせん。只い

つまでもかの人を、此所に留め置きて、鎌倉へな遣はし給ひそ」と、言ふに義仲領きて、「その義は我よく心得たり。我將軍になり上りて、武家の棟梁たる由を、信濃宮に告げ参らせ、且北国の賞罰を、執り行はんと思ふ也。和殿は信濃へ赴きて、これらの旨を計らへかし。我は今より都に住まひて、法皇に勧め奉り、宮を位に即け参らせて、入道相国清盛の、▲右の中へ ▲左の上より 榮華あいかげに倣はんと思ふのみ」と、言ふを覚明おし止めて、「それは勿体なきことにこそ候へ。信濃宮と北国の、賞罰はさることながら、都に住まはせ給はんことは、必ずしもしかるべからず。平家のはかなく滅びしも、久しく都に住み慣れて、花奢くわしゃ風流を旨としつ、只公家にのみ交はりて、家業の武辺に疎かりし、怠りによりて也。都は四方に敵を受けて、武を用ふべき所にあらず。今より難波なにはに居城を構へて、居ながら都の賞罰を、掌り給ひなば、長久の謀はかりごと、これに増したる事やはある。この義を忘れ給ふな」と、言ふに義仲又領きて、「その義も我よく心得たり。疾く北国へ赴けかし」と、言はれて覚明心おちゐて、

かたのごとくに用意をしつゝ、雑兵数多従へて、信濃路指して急ぎけり。

◆頼朝、帰国を画策する

これにより義仲は、兼安・経久・兼通らに、各々入部の暇を取らせて、その領分へ遣はしけれども、頼朝をのみ留め置きて、鎌倉へ遣はさず。頼朝これに困じ果てて、又親良を秘かに招きて、謀を問ひ給ふに、親良頭を傾けて、「この義も亦覚明が、主君に申し勧めしことにて、木曾殿の胸の内より、出でたる義には候はず。君木曾殿に對面の折、御母上【劉太公】と御台所【呂雉】を、この地に残し置くべきに、一日も早く入部の暇を、給はるべしと願ひ給は、事成るべし」と申すにぞ、頼朝聞つゝ、眉を擡めて、「我が妻はとまれかくまれ、母親をさへ質として、当所に残し置かんこと、尤これ難義也。その義は従ひやすからず」と、辞み給ふを押し返して、親良又申すやう、「木曾殿の陣中には、重忠らをはじめとして、君に心を寄する者、これかれもつていと多かり。しかれば母君を質として、残し置き給ふとも、何ごとの

候べき。早く御心を決し給ひて、当所を立ち去り給はずは、御後悔もや候はん」と、しきりに諫め申しけり。これにより佐殿は、次の日次へ(23ウ・24オ)／義仲の陣に至りて、「大将分の輩は、入部の暇を給はりしに、某にのみその義なきは、疑ひ給ふこともやある。母と妻とを質として、当所に残し置くべきに、身の暇を給はれかし。早く領地に退かずは、兵糧の運送続かて、士卒難義に及ぶべし。この義を許させ給ひね」と、世に他事もなく願ひ給ふを、義仲聞つゝ、うち案じて、「言はるゝ趣さもあるべし。我よく思案を巡らして、これらの答へに及ぶべし。明日又来臨あるべし」と、応へて佐殿を帰しけり。その時兼平【鍾離昧】進み寄りて、義仲を諫むるやう、「軍師の信濃へ赴く時に、申せしことをいかにぞや、早くも忘れ給ひしか。たとひ佐殿言葉巧みに、身の暇を乞ひ給ふとも、東へな放ちやり給ひぞ」と、言ふを重忠【陳平】傍らより、「軍師の申せしことありとても、親と妻とを人質として、身の暇を乞ふ人を、留め給ふは道理に違へり。疑ひ給ふことかは」と、拒めば義仲ほう笑

みて、「重忠が申す所、全て我が心に適へり。疾く頼朝を呼び返せ」とて、兼平が諫めを用ひず、又佐殿に對面して、「和殿の願ひやむことを得ず、母御と内室を此方へ渡して、領地へ赴き給へかし。この義を早く答へん爲に、呼び返させて候は」と、言ふに頼朝喜びて、言承けしつゝ、忙はしく、葉上へ帰り給ひけり。

◆頼朝、帰国する

されば頼朝の母君「原作では劉邦の両親」は、熱田の大宮司の娘にて、義朝「底本「より朝」の後室也、外ヶ浜殿と称へしを、御台政子ともろ共に、福原に留め置きて、頼朝は手勢を従へ、相模路指してうち発ち給へば、親良もこれを送らんとて、義仲に身の暇を給はり、行くとも覚えず日を重ねて、箱根山【蜀の棧道】まで来にければ、親良こゝにて別れを告げて、頼朝に申すやう、「某今又君に別れて、再び津の国にをる由は、木曾殿を滅ぼすべき、大将を尋ね求めて、推挙いたさん爲にこそ候へ。この義はかねて広元に、割り符を渡し置きたれば、誰にもあれ件の割り符の、片割れをもて味方に参

らば、必ず重く用ひ給へ。これらのことは広元こそ、よく心得て候べけれ」と、言ふに頼朝別れを惜しみて、感涙の他なかりけり。

かくてあるべきにあらざれば、頼朝は士卒と共に、東の尾上を越え給ふ、後方遙かに見返れば、三枚橋に炎起りて、煙天を突き、煽々として燃えたりける。此時箱根の三枚橋は、今のごとき流れにあらざり、底は千尋に余るべく、下行く水のいと早く、崖より崖へかけ渡したる、その橋の爲体、甲斐の猿橋、信濃なる、久米路橋に異ならねば、渡るにだにも危うきに、一夫これを守る時は、万卒も進みがたき、もつとも嶮岨の山川也。星移り物代はりて、
 ○右の下へ／＼○左の上より山崩などにや埋もれけん、やうやくに道改まりて、今はさまでの橋ならねども、此時まではかたのごとき、棧にてありければ、遙かに炎を見返りたる、大将士卒はおしなべて、驚くこと大方ならず、「こはそもいかに親良が、三枚橋を焼きたるぞや。あの橋を今失はれては、かけ渡すことたやすからず。かゝれば山より西の方へ、赴く頼りなくなりぬ。

(23ウ・24才 親良、三枚橋を焼く)



こはいかにせん、恨めしや」とて、足摺りしつ、叫びしかば、頼朝も亦親良を、恨みて呔き給ふ程に、広元後より走り来て、頼朝に申すやう、「親良が橋を焼きしは、味方の心を一致して、敵に降参させまじき、謀にて候也。只これのみにあらずして、今あの橋を焼く時は、木曾殿心を安くして、佐殿都へ攻め上る、志なしと思はん。しかればこと皆味方の為也。恨み給ふことかは」と、

良(親良)「かうしてしまへば後腹痛めず。それで

よし、大義々々。

木こり「此橋を焼き落とされては、難義な者もあるけれど、●／●都よりのお下知とあれば、否と言はれず此通り。お約束の柴代と、骨折り賃を願ひますぞへ。

(左上。橋向こつゝの頼朝軍)

頼朝

皆々「言ひたいことは山々なれど、モウ書く所がない故に、見てゐる心を御推文字々々々。



(24ウ・25オ 義仲、成経を捕らえる)



秘かに諭し申すにぞ、頼朝「実にも」とはじめて悟りて、
騒ぐ士卒をおし静め、**次へ**(24ウ・25オ) / その次の日
に焚き木樵る、鎌倉に着き給ひけり。

◆成経の死

○されば又親良は、木樵らに銭を取らせて、三枚橋を焼
き落とし、三島の方へ下る程に、長瀬判官義定【項伯】
が、迎への為に遣はしたる、両三人の雑兵が、見え隠れ
にこゝまで来て、初めて由を告げしかば、親良これを
労ふて、相伴ふて山鳥の、尾張まで来にければ、もとの

へこの画のわけは、次の本文に見えたり。

侍(義仲)「なま白けた烏帽子首を、撃ち落として
腹をいる。其奴をこゝへ引き出せく。」

今井「御憤りはさることながら、申上たきこともあ
り。まづくお控へ下さりませ。」

侍「成経立とう。」

な(成経)「ゑらう手荒い人たちじや。わしは何も
知らぬさかひ、許していなしてたもやいのふ。」

主君、丹波の少将成経【韓王成】の館に参りて、安否をたづね申せしに、成経は不慮のことにて、福原にて身まかり給ひしといふ、おとづれ定かに聞えたり。

このもとを尋ぬるに、尾張国は近き頃、瀬尾太郎兼安が、領分になりしより、成経朝臣を追ひ出だして、所帯を没取したりける。これにより成経は、木曾殿に愁訴せんとて、福原に赴き給ひしを、義仲その義を取り上げず、「親良がいぬる頃、頼朝を送るとて、かりそめに



(25ウ) 親良、義定を訪れる

でしより、今日までも帰り来ざるは、彼二心あるにより、もとの主なる成経を、ことに託け遣はして、虚実を窺ふものなるべし。しからんには成経も、許すべき者ならず」とて、手討ちにせんとしたる折しも、今井兼平ひたすら諫めて、恙なきことを得たれども、義仲なほも疑ひ解けず、成経朝臣を押し籠めて、折々に責め問はせしかば、成経憤りに堪へざりけん、断食して世を去り給ひき。

親良この義を伝へ聞いて、驚き嘆くこと大方ならず、尾張に残りし家臣らと、共に法蓮に連なりて、主君の菩提

定(義定)「作者の腹から生み出さぬ、通俗物の筋なれば、相談いたす所が多くて、さぞや画組みに困りませうてや。

良(親良)「さやうともく。度々はないことながら、板元の○／○思ひつきにて、よんどころなく綴られますれば、大きに骨の折れる◇／◇仕事と、我らも察しをります。これにて拙者が心底をも、御推量々々々。

を弔とよひしが、さてあるべきにあらざれば、かの雑兵らに伴はれて、又福原に帰り来つ、長瀬ながせ。義定が宿所に至りて、しばらくこゝに逗留しつゝ、主君成経の墓を建て、さて義定に嘸くやう、「某は此年頃、山籠もりの願ひあり。跡を埋め浮世を避けて、不老の人とならまく欲す。これらの由を木曾殿に、聞え上げて給はるべし。いとまほり」**▲右の下へ**／**▲左の上より申す**と言ひ果てて、はや立ち去らんとしたりしを、義定「しばし」とおし止めて、「御辺の願ひは心得たり。しかれどもこと急に、立ち去り給はゞ後々の、障りともなることあらん。由を木曾殿に聞え上げて、身の暇を給はるまで、曲げて逗留し給へ」とて、世に頼もしくもてなしけり。(25ウ)

(一六)

◆親良、童歌を広める

齋いづか官介親良は、長瀬ながせ。義定に止められて、しばらく逗留する程に、主判官義定は、義仲の親族にて、よろづの事を預かり行ふ、第一の権臣きんしんなれば、日毎に営中に出仕して、宿所にをること稀なりけり。是により親良は、一人徒然に堪へざりければ、ある日たかの楼のぼにうち上りて、まづあちこちと遠見するに、こゝは義定の書齋にて、古今の記録多くあり、又京難波福原の、土農工商の訴へ文、又下し文も幾通か、机の上のぼにありしかば、心ともなく取り上げて、これかれとなく開き見るに、そが仲に鏗田けいであ三郎忠政【韓信】が、義仲を諫めたる、奉り文一通あり。その文ぶん言ごんに、「君当国を退陣して、京都に住ませ給ふべき由みるに、平家世を取つて廿余年、久しく都に住み慣れて、和歌の遊興に耽りしかば、**▲右の下へ**／**▲左の上より弓矢の技に怠りて、子孫幾程もなく滅びたり。清盛帝をさしはさみて、兵馬の権を取るといへども、かへつて武辺**

に疎くなりしは、只長袖と交はりて、驕りに家業を忘れしによれり。前車の覆りしを見て誡めずんば、後車の危うきをいかゞはせん。臣按するに、難波は海陸相連なりて、武を用ふるの福地なり。君難波津を居城として、東を征し西を伏し、ゐながら京都を守護し給はゞ、万代不易の基にして、天地とともに久しかるべし。これらの事を往ぬるころ、軍師と論じ候ひしに、覚明の思ふところも、又これ愚意と相同じ。願ふは京都の、

〔次へ〕(26才)



(26才 親良、義定の書斎に入る)

／御住まひを止めさせ給ひて、難波を居城とし給はゞ、公私の幸ひ、何物かこれに増すべき。軍師北国に赴きて、いまだ帰らず候へば、身を顧みるに暇なく、言上に及ぶもの也」云々とありしかば、親良驚き繰り返し見て、

○印へ／○印より「今日この鴈田が諫めしごとく、木曾殿難波を居城として、西の方へ平家を征し、東は佐殿を取り拉がば、誰かよくこれに敵せん。しかれども幸ひに、木曾殿この義を用ひねばこそ、その諫め文こ、にあり。木曾殿は心猛く、礼義に疎き人なるに、その身都に住まひして、天子に咫尺し奉らば、公卿殿上人に卑しめられ、讒言これよりやむ時なく、君臣の間悪くなりて、つひに朝敵となりぬべし。我謀を巡らして、一日も早く木曾殿を、京都へ住居させん」と、此時思ひ定めけり。

良(親良)「こりやこれ鴈田が諫めの一通。幸ひにして此ことを、用ひられぬは佐殿の、天運のいたす所。といふて油断はならぬはへ。

▼聯には「蝶鳥の糧千石也小米花 羅文」とある。



(26ウ・27オ 親良、秘かに童歌を広める)



かくて次の日親良は、長瀬の義定に催促して、身の暇を

もり（子守）「お坊さん、せみはいやく。その代

はりに、餡餅を買ふてあげますぞへ。

童「八公、乙りきな歌だのふ。おいらも覚えて歌は
ふく。

童「婦命頂礼安楽散より、なほありがたいお札だと

よ。おらア稻荷新道の、仙女香を買ふて来いと、

言ひつかつて来たけれど、教えるならその歌を、

覚えてゆかふ、もちつとくんねへ。

良（親良）「俺が言ふことをよく聞くと、天王さま

のお札もやる。欲しくば此天狗の面でも、鈴で

も何でもやつてしまふが、必ず俺に教はつたと、

寝言にも言ふまいぞや。

童「をちさん気遣ひしなさんな。師匠様に止められ

て、机の上に乗せられて、茶碗の●／●水を目

八分に、持たせらる、法【▼寺子屋の体罰】は

ある共、滅多に言ふて詰まるものか。なう吉公。

乞ひけるに、義定もこのことを、主君義仲に聞こえ上げ、すでに免許を得たりしかば、今さらに親良を、止むるに由なくて、ちとの路用を贈りけり。

○さる程に親良は、福原を立出でて、程遠からぬかたほとりに、旅宿を求め隠れあつ、あるひは祝・山伏などに、姿を簀し巷に出でて、里の童に物を取らせ、「我汝らによき歌を教えん。この歌を唄ふ者は、疫病・時の気諸々、の、悪しき病に染まることなし。もし此歌を何者が、教えたるぞと問ふ人あらば、『夢に神の教えしまゝに、唄ひ待る』と答へよかし。さてその歌は、

へ花の都をよそにして、難波に住まひは蘆分舟よ。

蘆の一節の世の人知らぬ、夜の錦をきそ始め。

かくのごとく唄へかし。忘れなせそ」と説き示して、繰り返しつゝ、教えけり。

◆鏑田忠政の切腹

かゝりしかは童らは、件の歌をよく覚えて、巷に遊ぶ日毎日毎に、幾人となぐ唄ひしかば、事やうやくに福原なる、當中に聞えけり。義仲これを怪しみて、かの童ら

を召し取らせて、○右の中へ ○左の上より ことのもと

を問ひ質すに、童ら皆答へて、「この歌は夢の内に、神の教え給ひし也」と、まことしやかに申せしかば、義仲いよく怪しみて、童らを帰し遣はし、歌の心を人に問ふに、生才覚ある近習の臣の、主に諂ふ者の申すやう、

「こは我が君の進退を、神の▲下へ ▲中より 告げさせ

給ふなるべし。かの歌に、『花の都をよそにして、難波に住まひは蘆分舟よ』とは、都に移り住み給はで、難波を

居城になされんと、思し召すを止むることか。又『蘆の一節の世の人知らぬ、夜の錦をきそ始め』とは、唐国の

古語に、富貴にして故郷へ帰らずは、錦を着て、夜行くがごとしといふ、諺も候へば、我が君平家を滅ぼし給ひ

て、富貴を極め給へども、御先祖の故郷なる、都に住ま

ずなり給はゞ、夜の錦に異ならず。大功に武徳を輝かし給ふに、その甲斐なきもの也。又『きそ始め』のきそは

木曾なり。木曾殿しからしむるといふ心なるべし」と説

きしかば、義仲ひたすら感心して、「汝が判断さもあるべし。こは氏神八幡宮の、童らに託宣して、我に告げさ

べし。こは氏神八幡宮の、童らに託宣して、我に告げさ

せ給ふなるべし。かゝる示現のあるからは、今さらに疑ふべからず。早く都へ移り住みて、大内を守護し参らせ、武徳を四方に輝かさずは、かへつて神の咎めに遭はん。疾くく」と次へ（26ウ・27オ）／**○**続き急がして、入浴の用意しきりなりければ、鐔田の三郎【韓生】驚き憂ひて、面おもてを犯して諫めしかども、義仲いかでか用ふべき、**○**左へ／**○**右より甚だしく叱り退けて、再び辺へ出づることを許さず。この故に忠政は、空うち仰ぎて嘆息しつゝ、「浅ましや我が君は、武勇あるのみ智略なし。楚人そじんはこれ沐猴もくこうにして、冠かむりすといひしに似たり。やみなんく」と眩くらきしを、義仲に告ぐる者あり、なれども義仲その義を知らず、これを博士に問はせしに、その博士答へて言ふやう、「楚国は唐土もうちうの東に当たりて、その風俗夷えいに等し。さればその国の主たる者、智術に疎く礼義を知らねば、これを譏りて大猿おほざるの、冠かむりを戴かきしに似たりといへり。沐猴は母猴もこうにて、大猿のことに候」と、詳らかに説き示せしかば、義仲勃然いっかといたく怒りて、「憎き忠政めが悪口あくこうかな。搦め捕らせて生きながら、舌を抜くべき奴なれ

ども、年ごろ我に仕へたる、者にしあればその義に及ばず。彼奴かどうに腹を切らせよ」とて、奥の九郎【韓信】を檢使けんしとして、鐔田が宿所へ遣はしけり。

その時鐔田三郎忠政は、衣裳を改め出で迎へて、君命を受け給はり、ちつとも騒ぐ気色なく、最期の用意をしたりける。その時奥九郎義経は、従へ来たりし、雑兵に下知して、庭に敷き皮を敷き設け、その身は床几に尻をかけて、自殺の為ていたく体を見届くるに、福原は義仲の、仮住まひなるをもて、鐔田が宿所はことさらに、取り繕つくろひしこともなく、築垣つぎかきなども露あらはなりければ、**▲**右の下へ／

▲左の上より近き辺ほどりの里人らは、垣間見んとて集ふ者皆垣の隙間より、秘かに見物したりける。そが中に、齋宮いひみや介親良も、ことの由を伝へ聞て、里人にたち混じり、鐔田が屋敷の外うちかた面より、垣間見てぞゐたりける。

その時鐔田三郎は、敷き皮の上に坐を占めて、奥九郎にうち向かひ、「某それがしは露ばかりも、身に過ちはなければども、良薬は口に苦く、諫言は耳に逆さかふにより、罪ならぬ罪に死を給はるは、無実の咎めに候はずや」と、言ふを



(27ウ・28オ 義経、鐔田の実検役となる)



義経あざ笑ひて、「御辺何でふ罪なしといはんや。そもそも御辺はこの年ごろ、君の辺に間近く仕へて、軍国の大事に預かり、主君に過ちある時は、次へ(27ウ・28オ)／諫むるをもて役義としながら、先には木曾殿清盛の、墓を暴かせ給ひし時、御辺ひと言もこれを諫めず、又平家の大厦高樓を、焼き失はせ給ひし時も、御辺又これを諫めず。又佐殿の許し置かせし、池頼盛主を呼び取りて、獄舎に繋がせ給ひし時も、御辺又これを諫めず。

兵「ア、これ惜しい侍だが、これで「盛衰記」

卷三十五「木曾惜貴女遺」の筋にもよく合

ふ。役目なればしよことがないや。

つば(鐔田)「良禽尽きて狡免煮らる、例を今又

我が身の最期。御錠使、見届け下されう。

つね(義経)「昔楚の韓生は、諫めて釜に煮られた

るを、切腹とはいとありがたき、▲／▲我が国風のいたす所。心静かに用意々々。

▼画面右上に、編笠をかぶった親良が描かれる。

およそ此三条は、皆これ主君の過ちなるに、御辺いさ、
 かも諫めずして、此度のことのみ厳しく諫めて、用ひら
 れぬを憤り、しきりに主君を嘲りて、大不敬の罪を得た
 り。御辺いかでか過ちなしといはんや。かの童歌を唄ひ
 たる、童らを恨むることなく、その歌を作り設けて、唄
 はせし人を恨め。その人も大方は、垣の彼方にたゞすみ
 て、垣間見てをるべきぞ」と、言ふに親良驚きて、人の
 後ろに隠れけり。忠政は思ふにも似ず、義経に説き破ら
 れて、再び返す言葉もなく、腹かき切つて臥したりけれ
 ば、義経はその首を、携へて立帰り、義仲に云々と、鐔
 田が最期の趣を、具に聞こえ上げにけり。

◆親良、義経に頼朝への出仕を勧める

○されば又親良は、この時に義経を、初めて見知りたり
 けれども、頼朝の舍弟ならんとは、露ばかりもこれを知
 らず、只「この奥の九郎こそ、その機を察する大器量、多
 く得がたき英雄也。ともかくもして説き勧め、鎌倉へ遣
 はして、木曾殿を討ち滅ぼす、大将にこそすべけれ」と、
 心に思ひ定めしかば、先に佐殿より給はりたる、名劍の

ありけるを、携へて日毎々々に、巷に出でて徘徊しつゝ、
 義経の他所へ出づる、便宜を秘かに窺ひけり。

さる程に義経は、私の用事■ありて、ある日一人
 の、供人を従へて、葉上の方へ赴く程に、親良後より呼
 び止めて、「卒爾には候へども、御辺は奥の九郎殿にをは
 さずや。ちと見せ参らせたき物の候に、こゝらに酒樓も
 候へば、立寄せ給へかし」と、言ふを義経見返りて、
 「問はるゝごとく某は、奥の九郎にて▲印の中へ／＼▲印の
 上より候也。見せんとあるを何かは知らねど、見ざらん
 も残り惜しかるべし。いざ給へもろ共に、彼処に行きて
 休らふべし」と、言ふに親良喜びて、うち連れ立てあた
 りに近き、酒樓に赴きつゝ、兩人二階にうち上りて、酒肴
 を出ださせて、はや二二献に及びけり。

その時親良が言ふやう、「某は世に稀なる、宝劍を所
 持したり。■右の中へ／＼■左の中よりこれを売らんと思
 へども、その器量ある人ならば、数多の値を得るとい
 ふとも、決してこれを○下へ／＼○中より授けがた▼
 「し」脱力」。しかるに御辺はその器にたへたる、英雄

(287・29才 親良、義経に膝丸を披露する)



なりと思ふにより、このこゝに及べるなり」と、言ふ

に義経うち笑みて、「某いかでかさる者ならん。しかれども名剣は、身を護る宝也。今売らんといはるゝは、も

とこれいかなる剣ぞや」と、問へば親良小膝を進めて、

「それ名剣に三つの差あり。十握の御剣は天子の剣、又

藤巻は●／＼藤原氏、これ大臣の剣也。又髭切・膝丸は、

ともに大将の剣にして、源家の重宝すなはちこれ也。某

は故ありて、かの髭切・膝丸の、不思議にも手に入りし

経(義経)「抜けば玉散る三尺の、氷の白刃にはほ

ひも精妙。▼／＼夏なほ寒きあつばれ名作。か

の唐土の龍泉・太阿も、いかでかこれに及ぶべ

き。憾むらくは俸禄薄き身の、○／＼才覚に調

ひがたき、値を問ふも何とやら、うら恥づかし

き藻塩草。

良(親良)「そを売り主の書き上げは、紙筆入らぬ

此割り符。手引きに任せて鎌倉へ、行かんとな

らばすなはち餞。お心使ひは御無用々々々。

かば、髭切をば往ぬる頃、佐殿に参らせたり。されば只今携へたるは、膝丸にこそ候なれ。まづ見給へ」と次へ(28ウ・29オ) / 言ひかけて、錦の袋に入れたるま、やをら取り上げて渡すにぞ、義経これを受け取りて、抜き放ちつらく見て、「かねてその名は聞ながら、真の膝丸なるべきか、定かに知る由なきものから、某買はましく思へども、数多の値は整ひがたし」と、言ふを親良おし止めて、「いな某はこの劍の、買ひ主を選むのみ、いかでか値を論ずべき。今我が頼み参らする、一義を受け引き給ひなば、その膝丸を参らすべし」と、言ふひまに義経は、刃を取めうちいたゞき、「さては御辺は齋宮介、親良殿にあらずや」と、言はれて親良につことうち笑み、「御推察に違ふことなく、某すなはち親良なり。往ぬる頃佐殿に、箱根山にて別れし時、大将たるべき器量の人を、秘かに選みて参らせんと、申せしことのあるにより、これかれとなく心をつけしに、御辺に増す者絶えてなし。早く鎌倉に赴きて、佐殿に従ひ給へ。必ず重く用ひられ、名を上げ家を興すことあらん。大丈夫たらん者、生

涯太刀持ち役として、老の至るを待たんはいと惜し。御辺の心いかにぞや」と、問はれて義経一義に及ばず、「某もかねてより、佐殿に仕へんと、思ひながらも便りなければ、今日まで空に過ぐしたり」と、言ふに親良喜びて、用意の割り符を取り出だし、「御辺鎌倉に赴き給はゞ、大江広元の宿所に至りて、この割り符を見せ給へ。これ某が手引きをいたす、証拠にて候へば、いさ、かも疑ふことなく、佐殿に聞え上げて、必ず重用せらるべし。等閑になし給ひそ」と、説き示しつ、渡しけり。しかれども義経は、頼朝の弟なる由を、なほも包みてさり気なく、件の割り符を受け納め、只喜びを述べて言ふやう、「教えの趣逐一に、心得て候也。日ならず当所を立退きて、鎌倉へ赴くべし」と、言ふに親良怡悦にたへず、「なほ▲右の下へ／▲左の上より此上に時を移さば、人に知らるゝこともやあらん」と、思へば主に酒肴の、値を取らせて義経に、別れて旅宿へ帰りけり。

◆頼盛の後悔

こ、に又、平家の大将頼盛【義帝】は、先に頼朝の陣



(29ウ・30オ 頼盛、夢に神女を見る)

中より、**○右の中へ**／＼**○左の下より**鴻の水門へ引き渡さ

れ、義仲の沙汰として、厳しく一間に閉ぢ籠められて、日のめだも見ずをはしたる、ある夜の夢に頼盛は、弥平兵衛宗清に俱せられて、一艘の小舟にうち乗り、渺々たる江河の沖に、浮かみ出で給ふ折から、たちまち西の方よりして、二人の天女天下り、頼盛卿にうち向かひて、「平家の武運尽き果てたるに、御身かくてをはしましなば、御命危うかるべし。疾くこの水底に、入りて浮世を避け給へ」と、言ふを頼盛訝りて、「波の底は人倫

神女「努々疑ひ難波より、淀の川瀬の水車、巡る因

果は逃れぬ罪障。思ひ合はする由あらん。天機は漏らさじ、さらばじやぞへ。

より(頼盛)「さては我が兄入道殿の、年ごろ信じ給ひたる、弁財天の□□示現なりしか。平家の祀りを断じとて、なまじい敵に降参したる、この身の不覚、今さら後悔。ハテ何としたらよからうなア。

の、これ住むべき所にあらず。さるをこゝにある時は、命危うしとて水中に、沈むとも亦死なん。心得がたきこととこそ」と、辞み給ふを押し返して、「さな宣ひそ、波の底には、宮殿楼閣多くあり。安徳天皇をはじめ奉り、平家の人々遠からず、皆彼処にこそ集ひ給はん。御身一人一門に、離れて又幾何の辱めを受け給はんより、御一族と次へ（29ウ・30オ）／もろ共に、長く龍宮に留まり給はゞ、いかでか楽しからざるべき。我々は嚴島の、



(30ウ 行家、頼盛に上京を迫る)

神勅を受け給はりて、御迎ひに来つる者也。疾くく」と促しつ、雪より白き手を挙げて、さし招かる、と見る程に、荒波たちまち逆立ちて、頼盛の乗り給ひたる、舟は巖に碎かれて、主は千尋の水底へ、沈みにけりと思ひしは、これうた、寝の夢なりけり。

○これはさておく、木曾義仲は、京都へ移り住まんとて、移徙の、用意しきりなりけるが、たちまち心に思ふやう、「我今都に住まひして、内裡を守るといふとも、公家の諸礼に疎ければ、よろづにたより悪しかるべし。池垂相頼盛は、もとこれ平家の歴々にて、公家の立ち振舞ひに慣れたる者也。か、ればしばらく彼を許して、まづ都へさし上せ、我が参内の案内者とせば、大宮人に笑はる、

行（行家）「首を継がる、ありがたい、御説を辞むは身の程知らず。気が違つたか、馬鹿々々しい。諄々言はずと急いだく。

より（頼盛）「すりやどう言ふても聞かぬじやまで。

ハテ是非もない●／●ことじやなア。

過ちはあるべからず。さは」とてやがて備前守、行家を
使ひとして、頼盛卿を赦免せしめ、「早く都へ赴きて、
我が入洛を待つべし」と、厳かに命じけり。

しかれども頼盛卿は、近ごろ見たる夢の告げにて、な
まじいに一族に、離れて福原に留まりしより、かゝる辱
めに遭ふことを、悔しく思ひ給ひしかば、今さら此義に
従ひ給はず、行家にうち向かひて、「先に我が一族の、
はかなく没落したる時、我は頼朝に降参して、義仲には
従はざりき。しかるに義仲は、頼朝の功を嫉みて、我ら
をこゝへ

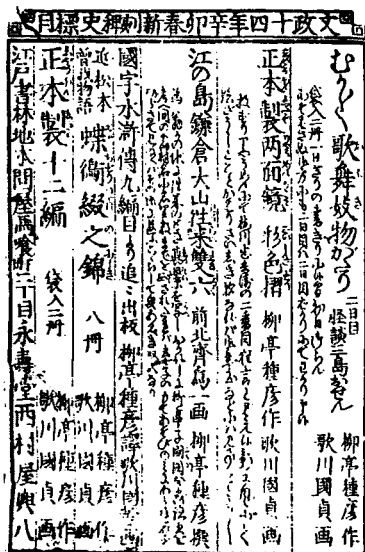
▲右へ

▲左より

召し取らせ、今又都の案内者
に、なさんと言ふはいかにぞや。我囚はれとなりぬとい
へども、官位は二位の納言たり、今さら何の面目ありて、
木曾が馬前の塵を追ふて、法皇に見え奉らんや。その義
は決して従ひがたし」と、言葉を放ちて辞み給ふを、行
家聞かず催促して、弥平兵衛宗清をも、獄舎の内より許
し出だして、ことの由を告げ知らせ、さて雑兵らに下知
しつ、「疾く頼盛主従を、都まで送れ」とて、時を移
さず追立てけり。

(30ウ)

第三冊 後表紙封面



▼奥目録「文政十四年辛卯春新刻裱史標目」。天理図書
館蔵蔵本 (91364 2079) や、早大図書館蔵の一本 (X
冊 6949) などが、右の目録をこの位置に置く。底本な
らびに林美一氏旧蔵本は、改装のためこの目録を欠く。
所掲図は、早大図書館蔵『正本製』(133091) の第
十二編上冊から転載した。

▼後表紙は煉瓦色。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)